

教研報告

パネルディスカッション

今 問われる宗教のあり方、その役割と使命

パネラー 立正大学教授 文博

伊藤瑞叡

現代宗教研究所主任

赤堀正明

法華道心教会担任

蟹江一肇

司 会 長野県円乗寺住職

小倉光雄

司 会

司会進行を努める長野の小倉です。初めての試みですので予め打合わせをすべく会合をいたしました。型にはまらぬ討論が最良という事で、今回如何なる方向に進むか不明ですが、テーマに沿った内容にしたいと思います。

内容については「今 問われる宗教の使命」。ポイントとしては、急激な社会革命の現代に於ける、現代人の宗教に対する考え方、価値観の変異、それに対して我々教師は如何にあるべきか、教師の使命、役割の問題。

第二点として、今、宗門が打ち出している「お題目総弘通運動」を宗教の基本の上で考える。以上二点の内容をもつて進行いたします。

先ず、総論的な形で現代人の思考方法、価値観、宗教への考え方。それに呼応する我々教師の使命は如何にあるべ

きかをお話下さい。

赤堀

最初に統計資料によって一つの問題提起と致します。日蓮宗の宗勢調査・NHKの宗教意識調査などにより、宗教に対する現代人の関心の高さが示され、こうした現象は宗教回帰現象と呼ばれる。

オイルショックを境として、それまでの日本人が「物質的満足によって心の満足を得た」と思っていたものが、高度経済成長が一応收拾し、物質成長の限界時点に於て「自分は本当に満足しているか」という疑問が生じてきた。

我々の時代は「飽食の時代」といわれるように、衣食住に於いてある程度の満足を得ている。その中で、我々は「この先、何を求めてゆくのか」という大きな問題に直面した。現代人、特に都市部の若人にこの生甲斐模索の一方として、宗教に対する人なる関心のたかまりが見られるこの現象は、都市部よりは農村部、若人よりは老人という従来の宗教傾向とは逆である。

高度経済成長に影響された宗教回帰現象は、第二次大戦後に躍進した巨大な新宗教、即ち、創価学会、佼成会とは型状を異にする新しいタイプの教団を形成する。これらの教団は第三次宗教ブームとして位置づけられる程急成長を遂げ、崇教真光、阿含宗、真如苑など数十万の信者を擁するまでに発展してきている。

周知のように近代日本に於ける宗教ブームは、幕末から明治初頭期、徳川幕藩体制が崩壊する中で誕生した第一次宗教ブーム。第二次大戦敗戦後天皇の権威が失墜し、社会的、精神的に民衆が混迷をきたした時期に勃興した第二次の宗教ブーム。そして今回の第三次宗教ブームと続いている。

こうした二度にわたる近代日本の宗教ブームの中で、新宗教教団は着実に教勢を拡大し、特に、第二次宗教ブームの中核として巨大化、近代化した組織を有し、一般社会への強い影響力を誇示しているものが法華系の新宗教といわれている。

昭和六十一年現在、我国の信徒総数中、仏教徒は四一％。そのうち法華系教団に属する信徒は一五・五％、その中で日蓮宗の信徒は僅かに一・〇六％にすぎない。又、法華系教団の中でも日蓮宗の占める比率は六・九％、最も多数を擁するのは日蓮正宗で、約半数の四九・八％を占める。次いで立正佼成会が一七・九％、靈友会の八・六％と続く。次に信徒の伸び率を見ると、四十年から四十五年までは高度経済成長期で、ほとんどの新宗教が信徒数を大幅に伸ばしている。四十五年から五十年迄はオイルショックの影響を受けてか横ばい或いは下降を示し、この頃から第三次の新宗教が頭角を露わし始める。又、五十年から六十年には、真如苑等の第三次の新宗教が急成長するのが目立ってくる。

日蓮宗はどうか。四十年から六十年まで終始無変化、現状維持で、グラフ上では僅かに上昇が見られるが、これは人口増加に伴う自然増と見るのが適当である。これらのデータからは、日蓮宗が各時代に適切な教化を成していなかったことが読み取れるのである。

信徒の多少が必ずしも宗教の盛衰を意味するものではないが、世法の開頭統一・広宣布布を願業とする日蓮宗にとって、この現状を認識することは重大である。従来からの指摘の通り、日蓮宗教団は徳川幕藩体制下で檀家制度を中心にした一種の御用宗教化していた面があり、明治維新後もそのなごりを引きずって今日に至っている。

教団が、教祖の教義の具体化される基体であろうとするならば、教祖である日蓮聖人の主眼である妙法弘通を以て、教団の存在理由としなければならない。新宗教はこの点について優れて、教化本位で実践を内向する教学を構築して、ここに教団の存在理由を置いている。この教化を以て教団存続の優先理由とする認識が、日蓮宗を含む伝統教団から欠落している。この事が教団をして現実社会に対応する機能を低下させ、教化を接点としてのみ獲得される大衆のニーズを撰取る法門を自ら閉じてしまったと考えることができる。この為、布教活動も教団側からの一方通行でしかなく、大衆の生きがいが為の「支えとなる宗教的欲求」は空をつかみ、心は充足されることなく今日に至っている。

と思われる。

法華系教団の教師一人当たりの年間教化人数を比較すると教化能力の差が明確に示される。以下の数字は昭和五十六年から五十九年までの各教団の教師が、一人でどの程度の信徒を獲得できたかを示したものである。

日蓮宗……………○・六五人

創価学会……………五・三六人

霊友会……………一〇・八六人

立正佼成会……………三七・七二人

真如苑……………九五・〇三人

日蓮宗では教師一人が三年間で一人の信徒も教化できていないと読める。この統計を見ると、日蓮宗教団が総弘通を志しているながら、全く総弘通の実績が上がっていないことが明確である。理由は、一に教師の資質の低下に帰すると思われる。江戸期以来僧侶に対する一般大衆からの批判は常に厳しいものがある。そのいくつかを挙げれば、江戸前期の儒者・熊沢蕃山、

キリシタンの御法度以来、信もなき仏法盛大になりゆき、天下おしなべて檀那寺を持ちぬれば、坊主ども戒律のたしなみもいらず、学問もいらず、心安く世を貪り、肉食、女犯、その自由なること俗人にまさる。

田中智字は、「畜盜法師」のことばを僧侶に投げかけている。

田村芳郎博士は、妙智会の宮本ミツ法話集の序に次のように述べる。

現代日本の既成仏教界のあり方には、多くの反省と批判を加えるべき点があることに今更ながら驚かされる。例えば、現代の寺院は墓場であり、住職は墓守りと言っても言い過ぎでない程に、死者儀礼、死者管理に終始している。葬式、年忌、お盆、彼岸など寺院の主な年中行事は全て死者に關しての法要であり、そこに集まる人々は、

自ら道を求めて教化された信者ではなく、いわゆる家の宗教を奉ずる檀家である。一体いつ如何なる理由で、既成の仏教寺院はこの様な状態に陥ったのか。それは一六三七年の島原の乱を江戸幕府がキリスト教徒を根絶するためにとった政策に起因する。幕府は宗門改め役を置き、国民全体をいづれかの寺院に属せしめ、各自の所属する宗旨を明らかにする「宗旨人別帳」を作り、結婚、旅行、就職、転居などの際には所属寺院からキリスト教徒ではなく、その寺の檀家であるという証明書を提出させ、今日見られるような檀家制度が確立されるに至ったのである。

今日当然のこととして行っている戒名、位牌なども幕府の政策の中で生まれたもので、宗教の自主的なものではない。

寺院住職はこの様な政策ないし制度に乗ずる限り、安眠を貧ることができた。然し、その結果、現に生きている人々に対する布教活動は忘れ去られ。仏教は躍動的生命を失い、死せる宗教と化した。……

ここで田村博士は、現代の既成教団の復活について、「何故、教化力を失ったか。何故、一般民衆の求めているものを理解することができなくなったかを考えなければならぬ」と結ばれた。

新宗教は確かに教義的には浅く、或いは本来の宗教に比較し劣るという指摘もあるが、現実には多数の人々を引きつけ一つの教団をつくり、一つの方向性を与えるという点に於いては、優れた教化力を有していると言える。日蓮宗の僧侶となるには立正大学に学び、信行道場を出て僧侶となっているのであるが、そこで教えられるものが果たして日蓮聖人本来の宗教であるのか、改めて問われなければならないであろう。

立正大学で我々が学んだものは、一般学問的理解による日蓮聖人の理解であって、日蓮聖人が理解された世界観、社会観、宗教ではない。信行道場でも本来の意味での教化、教化学、教化方法を学ばぬまま僧侶として世の中に出てしまう。かような点において、我々はもう一度日蓮聖人の教学とは何か、教化学とは何か、教化方法とは何か、改め

て認識し学ぶ必要があると思う。

司 会

新宗教との対比をしながら、今回の問題の本質について提案をして頂きました。次に蟹江上人より現場の問題として、ご意見を御願ひ致します。

蟹 江

現代に於いて一番大事なことは、人間の心の問題に対する見方が、日蓮聖人を通して社会構成の中で如何なる形で展開されるべきかと言ふことである。

現代の世の中は、例えれば、日照り渇水で人々が「水が欲しい」と言っている様に、宗教を本当に求めている状況であり、故に、第三次の宗教ブームなるものが興ってくる因もここにある。大小様々な新宗教が興ってきているが、大衆の中で自分自身が己を失ってしまうような宗教の求め方が現実にも生まれてきている。

日蓮聖人の「日蓮が慈悲広大ならば……」の言葉があるように、人間が存在する限りは、人間社会のニーズに対応するものが大切である。

この意味において、現代人の姿として、現場において宗教的要素の中の諸問題として様々に考えさせられる問題が多々ある。

最近になり、ようやく学校教育の中でも宗教に視点が向けられ、高校生に対して、宗教学が社会学の中で配慮されつつあり、又、社会全体の中での要望という形で認められようとしている。社会は人間が形成する存在である以上、人間自体の研究と認識が必要となるのであるが、人間が人間を充分に理解し得ぬ誤りが、現代のひずみのある宗教の世界となってしまった。故に、人間を正しく理解せしむる所に宗教の深い意義があり、その役割は重大なものである。従って人間が正しく人間を理解できぬならば、如何に正しいものを作ろうとしても不可能である。この意味に於いて、

人間が生きるために必要な条件である「知・情・意」を大衆に与えるために、社会に対して更に深い認識と慈眼が大切である。現実の社会にあっては、大学、講習会等、種々の形で知識（知）を売っているが、人間の心（情・意）を売るところはない。何故ならば、人間は教を聞いて、それによって自分自身が自覚をもって悟るところに情・意の姿があるからである。それらのものを与えてゆく。即ち、自らの自己意識と自覚を自分の身体の中にとりこむ事をリードすることが、今最も必要なことであろう。

天台大師の「極愚の中の愚」という言葉がある。極めて愚かではあるが、その愚かさを知ることが大切なことである。宗教界の混乱が、人間の混乱をひきおこすように、世の中全体を乱す原因になっているのではないかと思う。この混乱を救うために、我々は真実の仏法を求めながら、社会に対し、それを母が子供に母乳を与えるが如くに与えなければならぬし、又その方法を学ばなければならないのである。

現場においては、商工会議所、中小企業、高校、病院等、様々な立場に於いて講演をしますが、究極に於いて、人間に与えられた人間の心を如何に理解するか、「如日月光明 …… 能滅衆生闇」の如くに求める心。法華経はいくら求めても、人間が生きている限りは際限がない。それを求めて与えていくことが出来るように、更に深いものを纏むべく反省し、精進することが必要である。

世の中は宗教を切実に渴望している。それに対して、与える心が教師として非常に不足していることを、現場に於いて常に考えさせられている。

司会

大衆の心を纏むことに欠けるといふご指摘を頂きました。次に伊藤先生お願い致します。

伊藤

現代という時代状況をお二人が分析されましたが、日蓮聖人の門下としては、「祖師の心を心とし、その行跡を

踏まず」という状況の存在を認識反省し、「祖師の心を心とし、その功行の跡を踏む」という毅然とした、情熱的にして、かつ前向きな態度を保持するべきである。

日蓮聖人の行跡は何か。現代の現状を的確に把握され、将来を確実に洞察された、と言う点に本化上行の面目がある。依って我々は「跡を踏まねばならない」のであるから、現代の状況を的確に判断しなければならぬ。それは、現代人の心にある不安などの実存条件に逼迫されている有様を慈悲心をもって洞察することに通ずると思われる。

末法は「鬪諍堅固 白法隱没」「五逆誘法 三毒強盛」と言われるが、これは仏教学、宗学的知識であるので、我々にとって日常的言葉で、それが何を示しているかを確認する必要があると思われる。いったい私どもは実際にそれを体験的に把握し、それに対応するだけの実力を自ら果敢に体得する努力をしているであろうか。反省する点が多いというのが現状であろう。

現代の精神的状況を別な観点より見ると、次のように見ることが出来る。

即ち現代社会の特徴は、先ず機械化している事である。その結果、集団化・平均化した大衆社会になっている。然し、二、三年前から現代知識人の中にも、大衆を越える大衆社会の否定という動向が出つつある。平均化した結果、人間は装置の番人になり、合理主義の殻の中に閉じ込められて、人間の非合理の心が開放されないままになっている。その結果、宗教家も創造的な自由としての本質的な自己を失いかけていのである。我々は創造的自由な精神を保っているであろうか。否である。本当の自分が失われつつあり、自己を回復しないままに、教化の対象となる人々を教化できるのかどうか。問題となるところである。ともかく、現代は実践的な主体としての威厳を有した、独立した人格をお互いが失いかけている。人間の主体を見失い、喪失しつつある。一言で述べると「心を失いかけている」。心の救いを求めざるを得ない状況にあると言えるであろう。換言すれば、それは「絶望の時代」と言える。この絶望の時代は、今、始まったことではなく、宗教的に英邁で敏感な精神を持った人々は、いつも絶望の時代としてその時代

を把握し対処してきたのである。

かような問題に対して、人類の諸部門は如何に対応しているのか。科学は？ 科学が発達するにつれ、むしろ人間は技術の奴隷と化しつつあって自己を喪失しつつある。芸術はどうか？ 芸術は享楽の手段と化した。では哲学はどうか？ 哲学は観念の遊技にふけり、心の救済、将来の指針等を示すダイナニズムが稀薄である。

宗教はどうか？ 一言で述べると、信仰の魅力を失っている。然るに我々の宗門の宗是は、信仰こそ成仏の直道であるという「信行止意」である。然し、社会全体としても、社会の中の日蓮宗にしても信仰の魅力を失っている。信仰の魅力を回復することが我々の使命である。

では、人間学的な諸思想はどうか。マルキシズムはどうか？ 全くインチキである事が暴かれた。いまだこれを疑似宗教として信仰している人、宗教家さえもいる。然し、マルキシズムは社会学的、哲学的、物理学的観点から見ても自己完結性をもっている。しかし、もはや唯物主義は成立しない癡論である。精神科学としてのフロイト主義はどうか？ これは平均的な人間のみならず対象認識であって、個々の人間の心の病を救うという、本質的な人間そのものに触れる力を失っている。かような心もとなない状況が現代の精神学的状況である。

別な観点よりして、現代人の心のあり方はどうであろうか。種々、分析解析されているが、一言で示すと「アノミーの状態」にあると思われる。「アノミー」とは何か。社会的次元に於いて、個々の人間が社会・集団の秩序・価値の体系の崩壊をきたしていること。換言すれば「よるべ」（「己が何に根拠したらよいのかの根拠」）を失っていると
言える。

個人的観念に於いてアノミーとは何か。不安、失意、無力感、自「喪失感、自「崩壊感覚である。自分の足下に虚無が開いて、いつ地獄に落ちるか分からぬような不安、喪失崩壊感覚である。このアノミーを現実 に即して、如何に克服したらよいのかという、現実対応能力が欠けている不適応な状態が実状であろう。自分が常に多くの集団から疎

外され、逸脱状況の中に自分がある。社会的次元、個人的次元に於いて現代は特にアノミーの状況にある。故に、今こそ「是好良菓、色香美味、皆悉具足」の末法の要法が求められているのであるが、それを効果的に示すことができないところに我々のジレンマがある。

では誰がそれを示しているか。疑似宗教が営利主義の中で一応の指針を示しているのであるが、それに対して真実の批判ができていない状態に我々があるという事は残念である。

ともかく現代は先に示したアノミー、アノミーが人々をさいなんでいる現状にある。この状態に我々も襲われるが、然し、それは「我々の下種の妙法に依ってそれを克服できる」という自覚と信仰が確立するまで、信心を基として行学に励まなければならぬ。そのうちに確信、教化力となって顕現するであろうと志念を持つのであるが、最近の青年層、若年層に顕著に見られる無連帯感、無秩序、無規範（アノミー）に対して、我々は如何に対処すべきか、討論を重ねたいと思う。

司会

三先生それぞれが心の問題を重視され、現代という時代の把握と認識、大衆の心理把握の必要性、現代人の心の基底は不安感、喪失感等にあることを指摘され、心の救いの問題を重点的にお話頂きました。

次に、現代はオカルトブームなる第三次の宗教ブームですが、心の救いとオカルトの関係をお話頂きたいと思えます。

蟹江

創価学会、立正佼成会、妙智会、妙道会、霊友会にしてもほとんどが教祖中心の思想であるが、それぞれの宗門が実際に与えているものは、貧困、病氣、争い等の欲望解決の手段としての宗教（現世利益のみ）である。然し、貧病、争の根絶を願っても、それは自己の心の中に於ける解決が不可ならば不可能である。かような意味に於いて日蓮

聖人の教えは、人間の心の解決策を如実に論理的に示されており、佼成会、創価学会等に於いては、この点の論理性、視野に欠けるものがある。従って「人会させる、祀る戒名を増やさせる」式の布教形態こそが全ての功德につながるという実績となっているのである。

我が宗門にとって大切なことは、更に深い人間性、人間的な生き方を与えるところに日蓮聖人の本当の教えがあると認識することであろう。創価学会、佼成会等の人々も討論での転向者が多いが、過去に実績を踏まえた信仰者は、それなりの強さを有している。我々はそれを越えるものを与えてゆかなければならないであろう。

青少年問題にしても、何とかして心の解決を求めたいために、例えば暴走族に入る。極端な例は反社会的行為にその充足を求める。我々は困難であろうとも、それらを越えるものを理性的に、情熱をもって与え続けなければならぬ。例えば学生なら学生の気持になって考えてみて、人間の心を与え続けられれば、自然に心が変化するのである。この様な観点からしても宗門人としては法華經の教えの中に、人間理解への視点が数多く存在することに気づかねばならない。教育の世界、経営の世界、看護の世界等多くの立場の中に、法華經の思想と絡めて教化する可能性が存在するのである。即ち、求めるニーズに対し与えるべきものは充分にあると気づくべきであり、又、それを求め続けなければならぬのである。

既述のように創価学会、佼成会等では、「会に入れば」式で災難・病気が除かれるとするのであるが、否、災難・病気も全て人間の心の問題なのである。従って、aなる心の人間はAとなる、bなる心の人間はBとなる、と個々のケースについて語り合うと、徐々に理解自体を深め信仰心を起こしてくるのである。

新宗教の世界にあっても、宗教の本質を殆ど知らない人も多い。宗教は宗派と解している人がいる。宗派というものは後の残骸であって、仏の真の心は何かということ話し、与えると徐々に理解してくるのである。仏教とは何であるか？ 求めている人々は非常に多い。これらの大衆に仏教、仏の心を説く大いなる必然性があり、我々教師には

その力量が強く求められているのである。

新宗教において言われる「戒名を増やす、祀るものは何か」等、祀るものに対する基本路線が全く不明。ただ、法華経のお題目を唱えていればよいと言うのみで理論性がない。故に、宗門としては知性、理性をもって、人間の心の解釈を提示することによって健全なものが形成されてくるのではないかと思われるのである。

司会

再び、信仰心と心の解決の必要性を御提示頂きました。

赤堀

今、オカルト的現象が若い世代に大変興味をもたれ広がりつつあるが、この状況が何故なのかを検討する必要がある。この点については、我々が日常何をしているかという事について先ず触れなければならない。

我々が行っていることは、「死者には葬儀、生者には祈禱」。これが我々の宗教活動の大方を占めるであろう。戸頃重基先生がこの点について、次のように述べられている。

既成仏教は一方の極に死者の為の葬式仏教を持ち、他方の極に生者の為の祈禱仏教を用意して、社会の習俗の中へ深くとけこんだ。江戸時代以来、自然にそうなったとも言えるが、うがった見方をすれば、既成仏教は葬式と祈禱によって計らずも仏教に於ける生死一如の教理をいつとはなく習俗と一体化してきたのである。

更に、この二点がなくならない理由として六カ条を示している。

- (1) 大衆の知的な水準の低さと迷信。
- (2) 科学文明の進歩と社会水準の不均衡。
- (3) 災害の過剰と政治の貧困。
- (4) 除災招福への止み難い衝動。

(5) 鎮護国家仏教と天皇制の伝統。

(6) 社会不安と人間存在の有限性から生ずる無力感。

また、「これらのものが在る限り、たとえ祈禱仏教が消え去っても、それを再生産する人間の祈禱行為は後を断たないであらう」「葬儀は祈禱に比較すると一層習俗的であるが、死者の冥福を祈る点でやはり祈禱行為の延長なのである」と指摘されている。即ち「祈り」が心にかかってくるか、あるいは肉体的なものにあるかと言ふことであるが、ともかく宗教は「祈り」というものによって江戸期以来成立してきたと見られる。

過日、本宗の教学とラオス仏教との討論に於いて、宗教の本質についてかなりの相違点が見られた。本宗の「日蓮聖人は宗教による現実改革、立正安国を自身の宗教生命としていた」という意見に対し、ラオス仏教僧は「宗教は『祈り』であつて現実の問題にはかかわらない」「若し、仏教が現実の問題を解決する、社会国家の問題に触れるとすると大問題 ……宗教観の転換となる」と述べたのである。

「祈り」、特に真言密教的なものが盛んになっている裏には宗教は不思議な現象を起こす、神秘的な体験をもたらすという理解がされて来ていると考えられる。第二次の新宗教の特色として、現世利益的視野の中で祖先崇拜が盛んで、呪術的要素をかなり含んでいる。シャーマニズムの傾向が強く、神秘的靈験を強調し、心霊の問題に関心をもち迷信的要素が多いと指摘されているのも、神秘的なものが重要視されていると見る事が出来るのである。既成仏教が整束されていく過程で脱け落ちていった面が第二次の新宗教に求められていったと考えられる。

特に法華系の新宗教の大きな柱は、先祖供養と法座、そして占いである。先祖供養においても、先祖供養観という点では我々の先祖供養とは特色を異にする。大きな相違は、先祖供養と我々の幸せ・徐災得幸、現実の生活と先祖の成仏をイコールで結び付けて考える。この点、既成仏教の儀礼化した先祖供養観とは大きく異なる。新宗教では葬儀、年回等に対して独特の意義付けがなされ、その意義付けが現実の我々に直接関係する意義付けとなっている。

一例を示すと、「今、神経痛で苦しい」と相談すると、「何代前の先祖がやはり神経痛で苦しんでいる。その苦のまま死んでいるのであるから、苦を除くために先祖に回向する事によって自身の苦が除かれる。先祖と子孫は一体である」と指導するのである。これの良し悪しは別にして、現実の問題と宗教儀礼を密接に結びつける努力が見られると思われる。

この点が第三次の宗教ブームになると更に顕著になる。何故か。第二次の新宗教が既成化し、教祖・指導者との心の結合が弱くなる。又、呪術的色彩は知識人の間では低俗視される傾向にあるので、徐々に学問的・文化的にハイレベルの教化に移行してきた。ところが、現代は既に指摘されたように精神的不安が充満している時代で、特に若者に著しい。この得体の知れない不安感の中であって求めるものは、絶対者の存在である。自分自身が生きている証しをそこに（絶対者に）求めたいということであり、解決策として、①絶対者への帰依、②自らが超人化することの二点が挙げられるのである。その結果、自らが修行することなく絶対者となる、不思議な体験を経験する中で絶対者と交流できるとされるオカルトが出現するのである。

この傾向はスーパーマン願望と言われる。誰れしもスーパーマン的万能な人間に憧れるのであるが、実際は不可能に近いのである。例えば、運動記録の更新が尋常な努力では成し得ないように。然し乍ら、一種の宗教儀式、宗教的修行によって自分自身、瞬間的に自己の能力以上の能力を体験することが出来るとするところに、現代のオカルト現象が顕著になってきた要因があると思われる。この傾向は今後益々盛んになり、学問的よりは劇画的に、劇画よりも直接その場で見て体験する宗教に、宗教そのものが変化すると予測されている。

これらの点に対して本宗が如何に対応すべきか。今後の討議と研究に待つわけであるが、学問的、哲学的、思想的に宗教をとらえることも必要であるが、直接的救済、個人に対して直接満足感を与えていく面が重要であり、その一つの方向として、我々は個人に対しては成仏という方向性、国家にとっては立正安国という方向性を与えることが求

められて来るのではないかと思われるのである。

司会

次に、立正安国の問題について。この問題は我々にとって、現在も今後重要な問題になるうかと思われまますので、この点社会と宗教、社会と日蓮宗について御願ひ致します。

伊藤

立正安国の問題の前に前述の葬式仏教、加持祈禱について私の見解を述べて見たいと思います。

原則的に私はこれを肯定致します。「葬式仏教」にまで仏教が立ち至ったということは、仏教全体としても、我々日蓮門下にとっても戦略的にはBetterであると考えられる。故に、それを踏み台にして、前提として進まねばならない。日蓮聖人にも『祈禱鈔』があるように、祈禱も教化の手段として此れを肯定しなければならぬと思う。祈禱を全く否定して出発するのは現実的ではない。

教化手段としては、次の三点が考えられる。

- ① 説法教化（言説布教）
- ② 口唱妙行（共にお題目の精神を確認しつつ修行する）
- ③ 加持祈禱

この③の加持祈禱が最も複雑・難解であるが、直接的でもある。念仏、禅も一種の祈禱であり、真言の三密加持は勿論のこと加持祈禱である。阿含宗の星祭りも加持祈禱である。加持祈禱の祈りは「貧・瞋・痴」の三毒をもつ人間からは消滅しないほど、人間の根本煩惱に結合したものであり、それが消滅する時はすでに「常楽我浄」の境地である成仏であるから、加持祈禱は容易になくなることはない。

問題は、この加持祈禱を如何に法華経の一乘、大乘の一善に開顕するかということであって、加持祈禱自体は否定

されるべきものではない。この意味に於いては九識靈斷も可である。我々が解決すべき点は、眞言の三密加持を法華經の一乗を以て破折し、本門三秘の信仰に引人せしむるだけの力量を持つように努力をすることであると思う。

オカルトブームなる現象は、若い人々の間では一種のファッション的、一時的な側面も有している（不安感が未解消の現実の中で）。病氣・貧困・経済的不安感にさいなまされ、医者、親族、社会からも見捨てられた人々は何を求めているのであろうか。自分のために祈ってくれる人、その人が偽りの祈禱で金銭を求めていると知ってはいても、それに頼らざるを得ないという現実があるのである。かような人には加持祈禱をやってもよいと思う。ただ、加持祈禱の後に説法教化、口唱妙行の下種結縁を如何に我々が成し得るか、これがポイントである。この点に全力を注ぐ宗門の体制造りをすべきであるが、これらは全て個人の個性的布教にゆだねられているのが現状であり、宗門的に反省、考慮すべき点であると思う。

我々は常に何かにすがりたい、何かを生命の、生存の光明としたいという願望がある。それに対して種々なるものが与えられているが、その多くはこれが疑似規範であって、本当の規範ではない。偽りの規範である。偽りの規範に執着し、これを「よるべ」とする限り、個人の心は最後には破壊し、集団の心も、社会も破壊する。故に、批判すべき疑似規範を批判して眞実を開顕し、正法を建立することが、個人に約して、家、国家、人類そして全世界に約して眞実の安穩をもたらすと考えられる。

以上の意味からして立正安国というのは、共同社会でなければ解決できない問題、共同社会の次元でなければ解決できない問題を、正法を建立するという正法治国の理想のもとに解決しようとされたのである。日蓮聖人はこの事に重点を置き、本化の知見に立脚し、時代を展望したのである。

『立正安国論』の「それ法は人によって……先ず国家を祈ってすべからく佛法を立つべし」の言葉は、客人の言葉であるがゆえに日蓮聖人の思想ではないとする見解が宗学、仏教学の大勢を占めている考えである。然し乍ら、これ

が客人の言葉であっても、それを前提として正法を建立することが、主人の立場から表明されているので、この言葉は日蓮聖人の思想、あるいは理想であると解してよいと思われる。

ともかく疑似規範を与えられることは、自己をさいなみ、共同社会をさいなみ、最後には「国滅び人滅せば、仏をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべけんや」という状況をもたらすことを日蓮聖人は先見し、それを憂いたのである。疑似規範を批判し倫理的法原則としての正法を提言することのできる能力ある宗門とならなければならないと思う。

赤堀

立正安国……我々と社会がどのように結合しているのか。或いは、何故、我々は社会と一体でなければならないのか。「何故、我々は人々を教化しなければならないのか」という問題である。我々は教化という命題のもとに、漠然と人に対して法を説いているのであるが、真に納得し必然性をもって、人を教化していることは稀であろう。僧侶は在家の人に法を説くことが職業化し、職業としての説法という心理が常につきまとうのである。かように解決されぬまま、大きな目標に向かって走らなければならない。立正安国に結び付く化他の原理、教化の原理が現在あまりにも論ぜられていないと認識されるのである。

日蓮聖人が「今、日蓮が唱うところは前代に異なり、自行化他にわたる南無妙法蓮華経なり」と仰せられた中で「自行化他にわたる」とすること。或いは「異体同心」「与同罪」「共業」といった考えに基づいてこうした中で我々が、教化の輪を個人から家庭へ、家庭から地域社会へ、地域社会から国家へと広げてゆかねばならないと認識する必要があると思うのである。

宮沢賢治の「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」の言葉が、ただの標語なのか、倫理的規範なのか、等々、解釈によって全く異なるのである。私は、自分だけでは決して幸福にもなれないし、救われもし

ない。人に法を説く事によって、人と共に救われていくところに自らの救いがあると思う。又、これが日蓮聖人の十界互具という心理の具体的な表現であると考えるのである。

十界互具というのは、心の中に十界があると同時に、世の中にも十界がある。修行の場に於いては私とあなたとが一体である皆運命共同体である所に、行位に於ける真理の生かし方があると思われる。まさしくこれが常不輕菩薩の「我深敬汝等 不敢輕慢」に表れるのではないかと思う。常不輕菩薩は經文の一句も理解せず、説法もせず、經文誦讀さえ行わなかった。然し乍ら、人々を礼拝することによって仏に成ったということに、日蓮聖人は信の大事さを見られていると思うのである。この信とは何を信ずるのか。信は真理を信ずるのである。妙法蓮華經を信ずるところである。全ての存在、全ての人々が妙法蓮華經であると信ずるところに、我々の成仏が現れてくると思われる。そのことによって始めて立正安国が具現化してくる。

我々は信仰という教えそのもの、本に書かれたもの、その教えを守ることに重点が置かれがちになるのであるが、日蓮聖人の信という点に視点を集約すると、信は全ての人々、全存在に対して心から信じ、敬ってゆく態度に凝縮され、それが全ての学問、哲学、思想を学ぶ基本的な心の在り方となる。妙法とは相對した觀念、自らと他、生と死の對立するものが一つになった姿と解されるが、この一つとなる所に立正安国というものが生まれ来ると思われるのである。

以上のような原理的な説明がなされなければ、今日の立正安国に結びついていく社会的な諸問題は解決不可能であろう。学問・教学的分野、教化学の分野、実践教化の分野、この三者が一つになって進まなければなるまい。三者が同じテーブルについて討議し、結果を直ちに實際の場に移す。良いと思うことを即時に現場に反映させ、その結果を見て次の方策を立てるところに教化の現代化があり、進歩があると思うのである。

我々は常日頃、信行という言葉を多々用いるが、これは小乗権迹の經文である法行に対して、それを克服・超越したものと用いられるべきものである。然し乍ら問題は信行の相状、信行の形態を我々がどれだけわきまえているかということであろう。それは知識で学問的に理解することではなく、得意するべきことである。心で真に納得し、行用・働きに我々がどこまで歓喜、随順歓喜の気持ちを持つことができるか。南無妙法蓮華經の五字七字の信行が最善であるということに、我々が如何に感銘するかという事が大切なことであろう。

他に一点重要なことは、但行礼拝である。但行礼拝は教学的には難解な問題もあるが、平明、簡潔には「訴えかけ」である。我々は訴えかけているであろうか。葬儀、加持祈禱の場も訴えかけのよいチャンスである。我々は日常、仏事・法要に追われ、新しい檀信徒の獲得は至難であるが、問題は、既得の檀信徒を仏事・法要の中で如何に本當の信徒とするかということである。檀家を如何に本當の本化の日蓮門下である信徒にするかという事であろう。葬儀、法事、祈禱等で参詣する檀家を本當の信徒にするために、訴えかけが大事であると思われる。

何を訴えかけたらよいのであろうか。日蓮聖人は「一念三千と申す大事の法門」、南無妙法蓮華經は一念三千と申す大事の法門であると示された。日蓮聖人は「南無妙法蓮華經の五字七字は因行を含み、果徳を含む」、「事行の題目は自行化他にわたる」とされたのであるから、他を教化しなければ真の御題目ではない。他を教化して始めて、口唱妙行の御題目が成就するのであるから、化他を含まない題目は迹門の題目、天台、世親、龍樹の題目である。自行化他にわたる御題目なるが故に、個人の上に約するのではなく、家に約し、国家に約し、世界人類に約して四海帰妙にまで御題目が流布流伝する、総弘通されねばならない点に、一念三千と申す大事の法門があるとするのが、祖師の御精神である。この口唱題目を我々は再確認しなければならぬであろう。

化他をしなければ本當の仏事法要にはならないとする一念三千と申す大事の法門、それを為す事が、喜び、随順歓喜の信行に通ずるとする精神が大切である。宗学、仏教学、教化学も重要であるが、最終的には如何に日蓮聖人に通

じ本化に結びつくかという個々人の心持であろう。そこに自分を位置づける。この努力を我々は日常的に行わなければならぬ。それが立正安国、更には、一天四海皆婦妙法に通ずるのである。

いつ一天四海皆婦妙法になるのかは不明である。永遠に到達し得ないかもしれない。しかし期するところには本化の願業があると思う。南無妙法蓮華經という日本語にしても、それを外国人が唱えるのか、唱えさせねばならぬのか。或いはNamah Saddharanapundarika Sūtrayaと普遍語であるサンスクリットで唱えたほうがよいのか、問題はあがるが、ともかく化他の四海婦妙の気持で布教することである。新興教団はその量を増している、我々も量を増やさねばならない。然し、それ以前に、日蓮が一門となり通す質の高い信仰者を育成し、自己改革しながら、檀家を信徒にする地味な努力が立正安国・四海婦妙に結びつくと考えられなければならない。

司 会

現代人の不安感、喪失感より心の救いの必要性。オカルトブームの背景、葬式仏教・加持祈禱仏教としての批判、それに対して現実的にそれを受けとめ、葬式・祈禱を法華經の信に導く場として考えるべきであるとする御指摘。社会と宗教に於いての立正安国について。立正安国に関連して総弘通についてもお話を頂きました。

総弘通について、蟹江先生、赤堀先生より御発言下さい。

蟹 江

妙法蓮華經は人間の生命である。従って、生命を命あるものに与え続けることが総弘通の大事であると考えるのである。

自他共に自らを磨き、自らを映す仏の心を、本当の心として、仏と共に生きる思想を与えるならば、御題目の思想は広まり続けると思うのである。如何なる時においても、命と対話する気持ちを有せば、如何なる場であっても眞の教えの中に生きることができないのではないか。それが総弘通の一つの原点でもあろう。

私は、宗門に入り、法華經の教えに触れたことに至高の幸福を覚える。そして、それを与え続けることが人生の燃焼であり、それが私の総弘通である。

赤堀

今、総弘通運動では信行会に取り組んでおりますが、信行会を単に檀家・信徒に対する説法の間であると考えたと失敗する。その全体が一つの心になる、そこが異体同心になる場であるという意識がなければならぬ。

一天四海皆帰妙法という事は、国全体が一つの心になる事である。妙法に帰することである。それが、自らの家族、自坊の檀信徒の中でさえ実施できないのならば、一天四海皆帰妙法は空言、日蓮聖人の理想と言うのみにすぎないであろう。夫婦、家族の中での異体同心、妙法に帰することによって互いに尊敬し、磨きあって、相手を自らの鏡として生きていく。かような場が信行会でなければならないのである。

現代人は共に生きる場所、語り合い、理解し、泣き笑う場所を切実に求めている。この事が信行会活動の第一歩となり、互いの礼拝行により共同体が確立され、お互いが修行しあう菩薩行実践の場となり、その輪を広げることが立正安国に結びつくと思うのであります。

※本稿は、昭和六十三年三月二日に、長野県飯田市文化会館にて行われた第十一回中部教区教化研究会議の報告書の一部を転載したものです。